

報告

# 歴史企画「関ヶ原の戦いを再検討する－龍造寺・黒田・加藤を中心に－」(2017年8月20日、於佐賀県立佐賀城本丸歴史館)における拙講演「関ヶ原の戦いを再検討する」の内容に関する報告

白 峰 旬

## 緒言

昨年(2017年)の8月20日(日)に佐賀県立佐賀城本丸歴史館において、歴史企画「関ヶ原の戦いを再検討する－龍造寺・黒田・加藤を中心に－」が実施された。その際、筆者(白峰)は、基調講演「関ヶ原の戦いを再検討する」をおこなった。その内容について、本稿では当日使用したパワーポイント(PowerPoint)のスライドをそのまま掲載することにより、報告としたい。

なお、当日の他の講演者の発表も含めた時程は以下ようになる。

①白峰旬「関ヶ原の戦いを再検討する」

12時30分～13時20分

②高橋陽介氏「吉川広家書状案について」

13時30分～14時20分

③中西豪氏「関ヶ原の戦いにおける龍造寺周辺の動向」

14時30分～15時20分

④ゲスト陣(長南政義氏、橋本靖明氏、円城寺雄介氏)による関ヶ原の戦いについてのディスカッション

15時30分～16時50分

⑤質疑応答

16時50分～17時

当該企画の実施にあたって、当日までの準備・当日の種々の手配等について大変御尽力された、佐賀戦国研究会代表の深川直也氏、及び、当日、拝聴させていただいた他の講演者の方々、そして、当日会場にお越しいただいた方々に厚く御礼を申し上げたい。

## 関ヶ原の戦いを再検討する

白峰 旬

## 都市伝説としての関ヶ原の戦い

- 一次史料による史料的根拠(一次史料による根拠)のない話が通説に化けた  
→ウソも100回言えば真実になる、の類い
- 通説の理解→明治時代の理解からあまり進歩していない。参謀本部編纂『日本戦史・関原役』(明治26年、1893年)以来、120年以上の停滞

## 都市伝説としての関ヶ原の戦い

- 都市伝説が通説化した→問鉄炮の話などがよい例であり、荒唐無稽な話が信じ込まれてきた→問鉄炮の話が明治時代以降、100年以上も信じ込まれてきたため、合戦当日、問鉄炮の話がなかったら、ということを全く想定できなかった

## 都市伝説としての関ヶ原の戦い

- あまりにも虚像が先行しすぎている  
→一次史料の検討をせず(無視して)、江戸時代の軍記物をそのまま現代語訳して満足してきた
- 江戸時代の軍記物が描く関ヶ原の戦い  
→家康の家康による家康のための関ヶ原  
→家康のワンマンショー(出来すぎた話のオンパレード)→それが通説化してきた

## 都市伝説としての関ヶ原の戦い

- 現在の我々は、江戸時代の軍記物が作った関ヶ原の戦いのイメージにあまりにも引きずられている→ゼロベースで考え直す必要がある

## 現在の布陣位置の決め方

- 現在の関ヶ原合戦の陣跡地の場所  
→神谷道一『関原合戦図志』(明治25年〔1892〕)を参考に、岐阜県の役人たちが参加して、現地事情を様々に考慮しながら決めた→慶長5年当時の一次史料によるものではなく、その信憑性という点で大いに疑義がある→石田三成の笹尾山布陣も明確に否定された(高橋陽介『一次史料にみる関ヶ原の戦い(改訂版)』)

## 現在の布陣位置の決め方

- 神谷道一『関原合戦図志』(明治25年〔1892〕)は、江戸時代の軍記物の記載をベースにして布陣位置を決めた図を掲載している
- 神谷道一『関原合戦図志』は広く流布した→当時の新聞に多くの書評が載った
- この本は参謀本部編纂『日本戦史・関原役』(明治26年〔1893〕)の前年に刊行された

## これまでの研究史

- これまでの研究史→一次史料を真剣に分析してこなかった→江戸時代の軍記物(いわば小説)の現代語訳に終始して、もっともらしい解釈を付加してきた(その典型例が小山評定や問鉄炮の話)

## これまでの研究史

- 関ヶ原の戦いについて、まともな学術論文がなかった→一次史料による分析が遅れている(本格的な研究の遅れ)
- 軍記物の内容を現代語訳するだけでみんなが満足し、何も新しいものは出てこない→錯覚していた→一般向け歴史雑誌による同じストーリーの再生産がえんえんと続いてきた→読者への刷り込み現象

## これまでの研究史

- 読者への刷り込み現象→歴史の虚像(関ヶ原の戦いの虚像)が歴史的事実であるかのように読者の頭に刷り込まれていく→歴史の真実を検討しようとする力を無力化してきた(いいかげんな通説を全く疑うことなく信じてきた)

## 関ヶ原の戦いのとらえかた

- 関ヶ原の戦い→政治史(政治上の権力闘争)と連動させて考えないと、その全体像が読み解きにくい
- これまでは家康目線(徳川史観)で権力闘争を平板にとらえずぎていた→家康だけに正義(政治的正統性)がある。家康は勝つて当然。江戸幕府(徳川政権)成立への一過程に過ぎない。

## 関ヶ原の戦いのとらえかた

- しかし、家康には政治的正統性はなく、豊臣公儀(石田・毛利連合政権)から追放(放逐)されて、江戸城から動かないように命じられた(江戸に逼塞した)→『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の記載
- 慶長5年9月15日はグレゴリオ暦(太陽暦)では1600年10月21日→9月15日という初夏というイメージだが、太陽暦に直すとすでに秋→なので当日の気温は低かった

### 伊達政宗の見通し

- 家康にはこの戦いに勝てる見込みはなかった
- 八月三日付井伊直政・村越直吉宛伊達政宗書状(『仙台市史』資料編11-1056号文書)→家康の政治的見通しが甘かったため、大坂の三奉行が機先を制してこのような事態(石田・毛利連合政権による反家康の挙兵)になった

### 伊達政宗の見通し

- 伊達政宗書状の続き
- 政宗は、家康に対して、大坂へ確かな使者を派遣して三奉行を諫め(いさめ)、秀頼に対して家康が御奉公をすべきである、としている→家康が大坂の奉行衆と戦うのではなく、政治的妥協をして秀頼に従うようにすすめた(家康の完全な政治的敗北を認めるようにすすめた)

### 伊達政宗の見通し

- 伊達政宗書状の続き
- 政宗が家康に対して、大坂の奉行衆と軍事的対決をすることに全く触れていないことは、戦況として豊臣公儀(石田・毛利連合政権軍)が圧倒的に有利であり、この時点で戦いを挑んでも家康にはとても勝ち目はない、と見ていたことを示す

### 伊達政宗の見通し

- つまり、豊臣公儀＝豊臣秀頼(天下人)の敵になった家康は政治的にも軍事的にも追い詰められていた

### 豊臣秀頼は天下人

- 秀頼は天下人になれずに大坂の陣で死んでいった(秀頼は次期天下人のまま死んでいった)→こういう通説的な見方は誤り
- 秀頼は豊臣秀吉が後継指名した時点で天下人になった、と考えるべき
- そう見ないと、家康の公儀篡奪(こうぎさんだつ)の過程が見えてこない

### 豊臣秀頼は天下人

- 石田三成・毛利輝元がなぜ秀頼を推戴して反家康の(諸大名からの)兵力動員が可能だったのか、なぜ家康を豊臣公儀から排除(放逐)することが可能だったのか→秀頼が天下人であったからこそ可能だった→秀頼が単に次期天下人ではこうしたことは不可能だった

### 豊臣秀頼は天下人

- 反家康の挙兵→反家康派(反家康グループ)は家康の露骨な公儀篡奪を阻止しようとした→家康の公儀篡奪(秀吉の遺命への反逆)のやり方に対する激しい憤りがあった

### 反家康の挙兵

- 石田三成・毛利輝元などによる反家康の挙兵は、いきあたりばったりの無計画な挙兵だったのか→そうではない
- これまでの通説では、結果だけを見て、悪あがきの無計画さが強調されてきた→どうせ家康に勝てるわけではないな見方

### 反家康の挙兵

- しかし、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には、家康に対して、日本史上まれにみる政治謀略が仕組まれた、という意味のことが書かれている  
→公儀から排除(放逐)された家康の前途は明るいものではなかった

### 反家康の挙兵

- 関ヶ原の戦いでは政権軍(豊臣公儀=石田・毛利連合軍)が敗れるが、政府軍が負けることは古代における壬申の乱(672年)も同様だった→政府軍がいつも勝つとは限らない→政府軍、というか石田・毛利連合軍が負けたという結果だけから、この挙兵の意義を過小評価してはならない

### 反家康の挙兵

- 現在の日本は戦後、自民政権が長いのでピンとこないが、外国の軍事クーデターのように、政情が不安定な国では、一晩で政権がひっくり返ることがある
- 当時の秀吉死後の政権内のパワーゲームは現在の我々では想像もつかない状態だったのであろう

### 反家康の挙兵

- 現在の我々はその後の結果を知っているので、家康中心に当時の歴史像を組み立てるが、なかなかすさまじい状況(権力闘争)であったことは、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』を読むとよくわかる

### 反家康の挙兵

- 「七月十六日付鍋島勝茂書状」(『佐賀県史料集成』古文書編11巻、155号文書)  
→ 鍋島直茂が上方へのぼることは増田長盛へ「申分」(言い訳程度の意味か?)を遣わすので、上方へのぼらなくても支障はない→この書状は家康を弾劾する「内府ちかひの条々」を出す七月十七日の前日にあたる

### 反家康の挙兵

- よって、「内府ちかひの条々」を出す前日の時点で、すでに石田・毛利方(豊臣公儀)が諸大名に兵力動員をかけていた証拠となり、その意味でも重要な文書(一次史料)と言える
- この文書からもわかるように、事前になんりよく練られた挙兵計画だった

### 9月15日の戦況

- 当日(9月15日)の戦況
- 問鉄炮の話がこれまで深く信じ込まれてきたため、当日は昼頃まで戦況は膠着(こうちやく)してきた、と理解されてきた  
→しかし、当日の戦いに参戦した島津家臣史料によれば、当日の昼頃(12時頃)には決着が付いた

### 9月15日の戦況

- そのため島津義弘は当日の昼頃まで戦わずに傍観してきた、とか、毛利秀元などの南宮山でも昼頃まで戦わずにじっとしていたとか(宰相殿の空弁当の逸話→勿論フィクション)といったファンタジーな話が真剣に信じられ、通説化してきた

### 9月15日の戦況

- なぜこうなったのか?
- 小早川秀秋が当日昼頃まで松尾山でじっとしていた、という架空の話を軍記物がでっちあげた
- この誤った時間軸にあわせるため、島津義弘も毛利秀元の南宮山も午前中は全く動かなかったという苦しいストーリーをでっちあげた

### 9月15日に小早川秀秋はどこにいたのか?

- 9月15日当日、小早川秀秋が松尾山にいたとする一次史料は皆無
- 前日(9月14日)に小早川秀秋が松尾山城に入った、とする記載も『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』など後世の編纂史料(二次史料)のみである

### 9月15日に小早川秀秋はどこにいたのか？

- 現在の我々は9月15日当日、小早川秀秋が松尾山から動かなかったという都市伝説が頭から離れないが、実はこの話は一次史料による根拠がない話なので、今後は小早川秀秋が前日(9月14日)から当日(9月15日)にどこにいたのかをゼロベースで考え直す必要がある

### 9月15日に小早川秀秋はどこにいたのか？

- ひとつの想定として、大谷吉継と共に最前線に移動していたか？そして、大谷吉継の背後から裏切ったのか？
- 不思議なのは、一次史料(同時代史料)には「南宮山」という名称は出てくるが「松尾山」という名称は出てこない点である。
- 松尾村という地名は一次史料にあるが松尾山という名称は関ヶ原関係の一次史料に出てこない

### 9月15日に小早川秀秋はどこにいたのか？

- 「九月十二日付増田長盛宛石田三成書状」(『古今消息集』、中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、684頁)には「松尾之城」と出てくるが、この文書は内容的に要検討の文書。そして、「松尾山」とは書いていない。
- よって、慶長5年当時、松尾山という呼称があったのかどうか検討する必要がある

### 9月15日に小早川秀秋はどこにいたのか？

- 「八月廿九日付松沢喜右衛門尉他二名宛保科正光書状」(『新編信濃史料叢書』2巻)には、「大柿二箆候之衆ハ石田治部少輔(石田三成)・筑前中納言殿(小早川秀秋)・備前中納言殿(宇喜多秀家)・小西撰津守(小西行長)・島津兵庫助(島津義弘)、右之衆二而候」→小早川秀秋が8月29日の時点で大垣城に籠城していたとする

### 9月15日に小早川秀秋はどこにいたのか？

- このことが本当であれば、小早川秀秋は大垣城から関ヶ原に向かったことになる
- その時、大垣城から関ヶ原への移動に大谷吉継も同道していた、と想定することは可能か？→高橋陽介氏の『大谷吉継・大垣城在城説との関係を真剣に検討すべきか？』

### 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- もう一つの問題は大谷吉継がどのようにして戦場(関ヶ原)に来て、どこに布陣したのか？
- 高橋陽介氏の説(『一次史料にみる関ヶ原の戦い(改訂版)』)では、伊勢を經由して9月12日以前に大垣(大柿)に入っており、9月14日の時点では大柿(大柿)にいた、としている

### 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- 通説では、大谷吉継の山中への布陣は9月3日とする(参謀本部編纂『日本戦史関原役(本編)』)→しかし、これは一次史料による根拠がない
- 通説通りならば、大谷吉継は9月3日から9月15日まで約半月も山中という場所に単独で野営していたことになる→こんなことがあり得るのか？

### 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- 城攻めなどの直接の戦闘状態にない場合、1週間～2週間(この場合は約半月)も単独で野営するとは考えられない(想定できない)→こういう場合、通常であれば本堂の城(この場合は大垣城)に入ったと考えべきではないのか

### 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- 高橋陽介氏は指摘していないが、「(慶長五年)十月八日付秋田実季宛最上義光書状」(「東北大学附属図書館所蔵秋田家文書』『横手市史』史料編、古代・中世)には次のように記されている

### 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- 「大柿二籠居候治部(石田三成)・刑部(大谷吉継)・備前中納言(宇喜多秀家)・嶋津(島津義弘)など、おをのゝ原へ罷出(中略)治部(石田三成)・刑部(大谷吉継)事者、主一騎にて伊吹をさして逃候を(後略)」→大谷吉継は石田三成などと共に大垣城に籠城していた、とする

### 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- この最上義光書状の記載をどのように考えるべきか
- この書状では大谷吉継は戦死せずに逃げたと書かれていることから小西行長と単純に取り違えていたのか？
- 或いは、大谷吉継は大垣城に実際に籠城していたのか？→とすると、高橋説を証明する一次史料になる

### 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- 大谷吉継が大垣城に実際に籠城していたとすると、最上義光書状に書かれているように、石田三成などと共に関ヶ原(山中)へ向かったのか？(ただし、最上義光書状では「あをのゝ原」へ移動した、としている)

## 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- 「八月朔日付中川秀成宛黒田如水書状」(『中川家文書』91号)には「伊勢・江州之堺目二城を拵、其大将二刑少(大谷吉継)被参之由候、右之様二城へ相拵候時者、内府之御上国と見へ申候」→この城は松尾山城のことか、或いは、それ以外の城か、いずれにしても新規築城ということになる

## 大谷吉継は大垣城に入城したのか？

- この城の大將に大谷吉継がなり、この新規築城が家康の西上と関係するということは、家康方軍勢を迎撃するための城という意味にとれる
- そして、8月1日の時点で大谷吉継は北陸ではなく、家康迎撃のため伊勢・近江の堺目に着陣予定だった、ということか？
- ただし、この情報は黒田如水が情報源なのでどこまで正確な情報なのか検討の必要はある

## 小早川秀秋と大谷吉継が大垣城に籠城していたとすると

- 通説でいわれている石田三成、小西行長、宇喜多秀家、島津義弘のほかに、小早川秀秋、大谷吉継も大垣城に籠城していたとするとどのような想定が可能か？  
→9月14日の夜に大谷吉継、小早川秀秋も大垣城から関ヶ原へ移動したのか？そして、石田三成などは山中へ布陣し、大谷、小早川は関ヶ原へ布陣したのか？

## 小早川秀秋と大谷吉継が大垣城に籠城していたとすると

- それとも、9月14日の夜よりも前に(9月13日?)、大谷吉継と小早川秀秋は先に大垣城から出て関ヶ原へ布陣したのか？
- この時点で、大谷吉継は小早川秀秋を味方と思い、疑っていなかった？
- このようにいろいろな想定が可能になる

## 考えるべきポイント

- 9月15日当日の大谷吉継の布陣位置(+それまでのルートと所在場所)
- 9月15日当日の小早川秀秋の布陣位置(+それまでのルートと所在場所)
- 9月15日当日、小早川秀秋はいつ裏切ったのか？(時間的にいつ頃なのか)
- 9月15日早朝の戦いはあったのかどうか？

## 考えるべきポイント

- 通説の固定的な考えにとらわれるべきではない
- 大谷吉継の山中布陣(通説)、小早川秀秋の松尾山布陣(通説)、小早川秀秋は昼まで動かずにじっとしていた(通説)、などこれまであまりに固定的にとらわれてきた

### 考えるべきポイント

- 現段階では確定ではなく、いろいろな想定(もちろん一次史料による史料的根拠は必要であるが)をした方がよい
- 例えば、「七月廿四日付中川秀成宛松井康之書状」(『中川家文書』、88号文書)には「大津宰相殿、伏見と被持合、内府様へ無御別義由之事」とある

### 考えるべきポイント

- このことから、京極高次は9月になって突然、家康に味方したのではなく、7月24日の時点ですでに家康方だったとみられていたことがわかる

### 9月15日早朝の戦いはあったのか

- 当日参戦した島津家家臣史料(『旧記雑録後編三』)を読むと、当日の時間経過は以下ようになる
- ①家康方軍勢が早朝(日の出以降)に大谷吉継の陣に攻めかかり、その後、小早川秀秋が裏切って大谷吉継の陣を攻めたため、大谷吉継の陣は壊滅し、大谷吉継は戦死した

### 9月15日早朝の戦いはあったのか

- ②その後、巳の刻(午前10時頃)に家康方軍勢が山中に布陣した宇喜多秀家、石田三成などの石田三成方本隊を攻撃した
- ③合戦の終了時間は午の刻(昼の12時頃)。よって、石田三成方本隊の戦闘時間(合戦開始から終了までの時間)は午前10時頃から昼の12時頃までの約2時間

### 9月15日早朝の戦いはあったのか

- ④大谷吉継は、それよりも早く、夜明け(日の出)以降に家康方軍勢と合戦をおこない、家康方軍勢と裏切った小早川秀秋の軍勢に挟撃されて敗北して戦死した
- つまり、早朝の戦い(大谷吉継の敗北・戦死)はあった、ということになる。ただし、主戦場は石田三成方本隊が敗北した山中での戦いである。

### 関ヶ原と山中の違い

- 早朝の戦いの場所は、関ヶ原であった
- 家康は書状において、山中と関ヶ原を書き分けている(つまり、山中と関ヶ原は別々の場所であると家康は認識していた)→「九月十五日付伊達政宗宛徳川家康書状」(『徳川家康文書の研究』中巻、698頁)では「今十五日午刻、於濃州山中及一戦」と記している

### 関ヶ原と山中の違い

- 「九月二十四日付小早川秀秋宛徳川家康書状」(『新修福岡市史』資料編、近世1、303号文書、170頁)では「今度関ヶ原御忠節之儀、誠感悦之至候」と記している
- このことから、家康方軍勢が石田方本隊(主力)と戦ったのは「山中」、小早川秀秋が戦ったのは「関ヶ原」であった、ということの意味している

### 関ヶ原と山中の違い

- このことは同時に、小早川秀秋が開戦時に松尾山に布陣しておらず、関ヶ原まで移動していたことを示す
- また、「九月十九日付林正利宛小早川秀秋感状」に「今度、於関ヶ原表、無比類働手柄之段、不可有並之候」と記されていることから、小早川秀秋が戦ったのは、山中ではなく関ヶ原であったことは明らかである

### 前日の御和平成立は捏造

- 吉川広家が合戦の前日(9月14日)に急遽(きゅうきょ)、家康との和平を取り付けた、というのは吉川広家による完全な捏造
- 合戦の前日に御和平を取り付けた、とする起請文(3ヶ条)の2ヶ条目を完璧に、本物の起請文とは別の文にすり替えた(確信犯のおこない)

### 前日の御和平成立は捏造

- 「吉川広家自筆書状案(慶長五年九月十七日)」(『吉川家文書之二』-913号文書)には、井伊直政・本多忠勝が連署して吉川広家・福原広俊に出した起請文の2ヶ条目には「惣和談不可有御別儀之事」(惣和談については御別儀がないこと)と書かれていたとしている

### 前日の御和平成立は捏造

- しかし、慶長五年九月十四日付の起請文(『毛利家文書之三』-1020号文書)には、そのような文は全くない
- よって、決戦の前日に吉川広家が御和平を取り付けたという話はタイミングがよすぎる出来すぎた話であり、フィクションである→9月14日の時点で和平は成立していない

### 前日の御和平成立は捏造

- そもそも、吉川広家は毛利家を代表して家康と御和平を取り付けるレベルの人物ではない(そんな大物ではない)。家康も毛利家の全権委任をされていない吉川広家と御和平を盟約するはずがない。
- 関ヶ原への動きでは、毛利家内では安国寺恵瓊の方がはるかに大物で重要人物

### 前日の御和平成立は捏造

- そもそも9月14日に家康と毛利の御和平が成立したのであれば、家康は何の苦労もなく、その後、大坂城へ入ったはず
- しかし、実際には黒田長政・福島正則などが家康入城前に毛利輝元と交渉して、毛利輝元が大坂城から退城したあとに家康が大坂城に入城している

### 吉川広家自筆書状案(913号文書)

- 吉川広家自筆書状案(『吉川家文書之二』913号文書)
- 書状案なので、いろいろと削除した文章(見せ消しの箇所)が多く入っており、内容解釈が難しい
- 吉川広家の自己弁護のフェイクがどこまで入っているのか見極める必要がある

### 吉川広家自筆書状案(913号文書)

- 書いてある内容において、何が真実で何が真実でないのかを検討する必要がある
- ただし、内容的に見て慶長五年九月十七日という『大日本古文書』の年次比定は正しいと思われる(つまり、後年のものではない)→「山中合戦」という文言が入っているので関ヶ原の戦い直後の史料として間違いないと考えられる

### 吉川広家自筆書状案(913号文書)

- この書状案には、石田三成などが大垣城から出て関ヶ原へ移動したのは、小早川秀秋の逆意があきらかになったので、山中に布陣している大谷吉継救援のため、としている→しかし、当日(9月15日)参戦した島津家臣史料(『旧記雑録後編三』)を読むと、大谷吉継と石田三成などの諸将は合流した形跡がない。救援が目的ならば合流するはず。なぜなのか。この書状案が虚偽を書いているのか?史料批判の必要がある。

### 家康方の先手メンバー

- 家康方の先手のメンバーは、一次史料でも史料により一致しない
- 福島正則、黒田長政→「吉川広家自筆書状案(九月十七日)」
- 福島正則、井伊直政、尾張衆→「九月十七日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状」

### 家康方の先手メンバー

- 福島正則(一番)、細川忠興(二番)、金森長近(三番)→「九月二十日付近衛信尹(このえのぶただ)宛近衛前久(さきひさ)書状」

### 家康方の先手メンバー

- 福田(福島カ)、細川忠興(ただおき)、加藤嘉明(よしあき)→『舜旧記』(京都の豊国神社の社僧・梵舜[ぼんしゅん]の日記)九月十五日条
- この4つの史料で先手として一致するのは福島正則だけ→福島が先手であったことは間違いない

### 家康方の先手メンバー

- また、生駒利豊(としとよ)の書状(当日の戦いの様子を記したもの)を見ると、尾張衆(尾張国内における少領主)も先手であったことは間違いない
- 家康は家康方軍勢の大將なので後方に位置していたと思われるが、一次史料では正確な布陣位置はわからない

### 家康方の先手メンバー

- 問鉄炮の話がフィクションであり、戦い(山中の戦い)が2時間程度で決着がついたとすると、この戦いにおける家康の見せ場は全くない→このあたりが問鉄炮の話が出て来た背景なのではないか

### 通説と白峰説の違い(開戦時間)

- ①【開戦時間】
- 通説→午前8時(『関原軍記大成』などの軍記物による)
- 白峰説→午前10時頃(巳の刻)(一次史料→「九月十七日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状」)→石田方本隊が布陣した山中への家康方軍勢の攻撃開始時刻

### 通説と白峰説の違い(開戦時間)

- ただし、開戦時間については、一次史料のみで解釈すると午前10時頃になるが、二次史料といっても当日参戦した島津家の家臣の史料(『旧記雑録後編三』収録)によれば、山中の戦いの以前の時間帯(早朝)に戦いがあり、そこで大谷吉継が家康方軍勢と、裏切った小早川秀秋の軍勢に挟撃されて戦死した

### 通説と白峰説の違い(小早川秀秋の裏切り時間)

- ②【小早川秀秋の裏切り時間】
- 通説→昼12時頃、裏切った。家康が命じた問鉄炮による(『関原軍記大成』などの軍記物による)
- 白峰説→開戦と同時に裏切った(一次史料→「九月十七日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状」、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』)

### 通説と白峰説の違い(両軍の布陣の違い)

- ③【両軍の布陣位置】
- 通説→石田方は鶴翼の陣で横一線に広く並ぶ(参謀本部編纂『日本戦史・関原役』の布陣図)→家康方はそこに突っ込む形になるので、石田方有利の陣形
- 白峰説→山中エリアにおいて石田方の諸将は近距離に固まって布陣(当日参戦した島津家家臣の史料による)→家康方に攻め込まれてドミノ倒しのように次々と各陣を突き崩されて即時に敗北した(家康方軍勢の先制攻撃を受けた)

### 通説と白峰説の違い(山中の戦い)

- ④【山中の戦い】
- 通説→関ヶ原が主戦場で関ヶ原に両軍が打って出て両軍が激突した(参謀本部編纂『日本戦史・関原役』の布陣図など)→午前中は両軍は一進一退の手に汗握る戦い
- 白峰説→山中に布陣した石田方諸将に対して、一方的に家康方軍勢が攻め込んだ(九月十七日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状)→石田方は打って出て戦っていない。最初から攻め込まれて防戦にまわった。

### 通説と白峰説の違い(山中の戦い)

- 白峰説→山中のことは、家康方軍勢が即時に乗り崩して、ことごとく討ち果たした。家康方軍勢が山中へ押し寄せ合戦に及び、即時に討ち果たした。(「吉川広家自筆書状案(九月十七日)」)

### いわゆる小山評定の問題

- 小山評定論争→否定論の立場(白峰)VS 存在論の立場(本多隆成先生)
- 小山評定→その存在を直接証明する一次史料は一つもない→何月何日にどこでおこなわれ、参加メンバーは具体的にだれなのか、は一次史料で立証できない

### いわゆる小山評定の問題

- いわゆる小山評定のエピソードでよく出てくる山内一豊は、そのおかげで大出世したのか？
- 掛川5万石から土佐24万石への大出世→約5倍の石高になる？  
→いわゆる小山評定での発言のおかげ？

### いわゆる小山評定の問題

- しかし、財団法人土佐山内家宝物資料館館長の渡部淳(わたなべじゅん)氏の著書『検証・山内一豊伝説―「内助の功」と「大出世」の虚実』(講談社現代新書)で鋭く指摘されている
- この本の帯には、「土佐藩主」は大出世ではなかった!、と書かれている

### いわずもがな小山評定の問題

- 渡部氏の本によれば(※以下引用)
- 土佐藩20万2600石の初見は慶長10年
- 山内一豊が土佐に入国した時の領知高は長宗我部氏の9万8000石を引き継いだ
- よって、わずか1.7倍(掛川5万9000石から土佐9万8000石)の平凡な出世になる

### いわずもがな小山評定の問題

- 最も重要な働きをした福島正則で2.2倍(尾張清須24万石から安芸広島49万8000石)、黒田長政で2.9倍(豊前中津18万2000石から筑前福岡52万3100石)
- こう考えると、山内一豊だけが5倍近い加増ということが、そもそも不自然である(※ここまでが渡部氏の本の引用)

### いわずもがな小山評定の問題

- 通説では、家康は本營の宇都宮城に入らず、7月24日～8月4日までの11日間も、家康は小山に在陣(野營)していた、としているが、このようなことがありえるのか？
- 小山から宇都宮は近距離にあるが、目の前の本營である宇都宮城に入らずに小山から引き返したのは本当か？